

幼なじみの俊秀3人が ジョイントコンサート開催

今回はまとめて3名のピティナっ子をレポートする。崎谷明弘さん、鯛中卓也さん、酒井有彩さんの高校生トリオは、ともにクラウドディオ・ソアレス先生に学んでいる。3月7日には3人が出演する幼なじみコンサートが大阪で開かれた。全く異なる個性を持つ3人は、同志としてお互いどのように高め合っているのだろうか。

同級生・同門・幼なじみの3人

昨年の第2回福田靖子賞選考会（高校生以下の若いピアニストを対象とした奨学金オーディション）は、第1回にもまして粒の揃った素晴らしい才能が競演し、巷にあふれるコンサートに勝るとも劣らない聞き応えのある内容となった。9人の高校生ピアニストが、世界の超一流教授陣のレッスンを受け、成果発表会で個性豊かな演奏を披露したが、中でも関西から来た3人の才能は目を引いた。

酒井有彩さん、崎谷明弘くん、鯛中卓也くん。ピティナ・ピアノコンペティションをはじめとする数々のコンクールで、小さな頃からそれぞれが優秀な成績をおさめ、今もまだ急成長を遂げている、同級生・同門・幼なじみの、関西出身、高校3年生トリオである。

酒井さんと鯛中くんは、生まれたときからのまさに「幼なじみ」。お母様同士が大学時代からの親友だったので、4ヶ月違いで生まれた二人は、同じステージを共有するのが当たり前だった。「B級でもC級でも、全国決勝大会とディズニールンドはいつもセット。ディズニールンド



に行くために頑張ってたようなものでした。」と鯛中くんのお母様が当時を振り返る。崎谷くんは、ちょうどその頃、地元兵庫県のコンクールなどで優秀な成績を収めて頭角を現しており、鯛中くんと賞を分かち合うようになった。

3人は、中学に入った2001年から、ヤマハなんばセンターに開設されたピアノ演奏研究コースに入門し、クラウドディオ・ソアレス先生クラスの一期生に選ばれた。3人の切磋琢磨はここから始まった。



三者三様の個性

酒井有彩さんの音楽は、シャープで思い切りの良いアプローチから、伸びやかな音像を描き出す。加えて最近では、空間に広がる音の微妙なコントロールに細心の注意を払い、丁寧に音楽を作っていくとする意識が漲る演奏で、豊かな才能を開花させている。「優れたリズム感と、隅々まで神経が行き届いた誠実な演奏。小さな頃から、緻密な練習と本番の集中力にととても刺激を受けました。」（鯛中くん）「芸術家タイプの情熱的な人、『炎の鍵盤師』です。」（崎谷くん）という2人の言葉が、酒井さんの音楽の多面的な魅力を物語る。

鯛中卓也くんの音楽は、知的で繊細。オーソドックスな解釈と澄み切った音色から、彼の真心と限りないやさしさが滲み出る。作品にふさわしい音色や音量の的確さは、練りに練られており、時折聞かせる途方もない美音に、この一音を聞くためだけでも彼の演奏を聴く価値があると思わせる。「はまったときには万華鏡を見るような神秘



▶『音の職人』鯛中卓也さん『優れたリズム感で誠実な演奏』酒井有彩さん、『大胆かつ情熱的』な崎谷明弘さん。(誰のコメントかは本文をご覧ください)

的な美しさがあります。」(酒井さん)「音に対する緻密なこだわりは真似できないレベルで、そこから全体を作り上げる『音の職人』」(崎谷くん)

崎谷明弘さんの音楽は、ドラマティックで雄大。スケールの大きな音楽作りと入魂の姿から、ピアノへの愛情が切ないほどに零れ落ちる。一方で、デュエティユやスクリャーピンといった精緻で難解な作品をすっきりと解きほぐす知性も持ち合わせている。「人を惹きつける迫力、舞台での存在感は圧倒的です。でも案外、3人の中では一番繊細かも…」(酒井さん)「大胆かつ情熱的で、聴衆を楽しませるエンターテイナー性溢れた演奏」(鯛中くん)

性格も音楽も、三者三様。相互に認め合い、尊重しあい、磨きあっているから、互いの音楽を表現する言葉もそれぞれに的確だ。タイプの全く異なる3人の音楽が、共通して自発的な喜びと輝きに満ちているのは、ソアレス先生、武田真理先生(酒井さん・鯛中くんが10歳から師事)をはじめとする彼らの先生方の日頃からのご指導の賜物なのだろう。

さらなる飛躍をめざして

3月7日、3人が大阪のフェニックスホールでジョイントコンサートを開催した。「Amis d'enfance concert - 幼な



じみコンサート」と題された演奏会は、幼い頃からの彼らを見守ってきた先生方、ピティナの支部の方々、同級生たち、先輩後輩たちなどで、満席の盛況となった。

コンサート前、開催を待ちきれない崎谷くんは「なかなかこのように、演奏仲間で、しかも同期の同門で、切磋琢磨しながら演奏会を開くことが出来ることはないので、楽しみにしています。企画の段階で意見の相違があったりしたのですが、今はそれを経て、より良いコンサートになる予感があります。」と語ってくれたが、演奏の内容はまさに、どこに出しても恥ずかしくない立派な3人のピアニストの競演となった。ピティナの支部のある方が「この3人ならもう、1人ずつでもコンサートを開いてもいいくらいだ」と仰っていたのが印象的だった。

同門・同級生・幼なじみの3人。お互いに切磋琢磨して刺激を受け合ってきたといえれば聞こえは良いが、実際は自身の力量を比較するライバルが常に近くにいることで、悩みを深くすることもあっただろう。

けれど今、「私にとっては、最高の刺激を与えてくれるかがえのない素晴らしい仲間です！」と酒井さんは言う。どのコンクールを受けるか、何を次に弾くか、作品や演奏をどう考え、感じたか。3人は常に語り合い、確認し合い、意見をぶつけ合う。そして、ソアレス先生の指導は、適度な距離感で3人を見守り、そして何より3人を一つ一つの個性として尊重している。

終演後は、聴衆の皆さんに囲まれ、記念写真におさまったり、サインを求められたりと、充実したコンサートの余韻をいつまでも楽しむ3人の笑顔が印象的だった。彼らを支えてきた先生方、ご両親、ご家族を心から祝い、さらなる将来を期待したい。高校3年生になった彼らから、ますます目が離せない。(取材・文◎加藤哲礼)